繪本婦女子宝

へ13
3784
1

門へ13
號3784
卷1

繪本姿はの海上ゝ巻目録

○美濃弟媛　○通衣姫　○豊前刀自賣
○大和義婦　○大井子　○金子
○阿都麻　○巴尼

和歌しゝく下ゝ巻

○松下禅尼　○静　○川浪
○待宵侍従　○千代能姫　○禅高妻
○園女

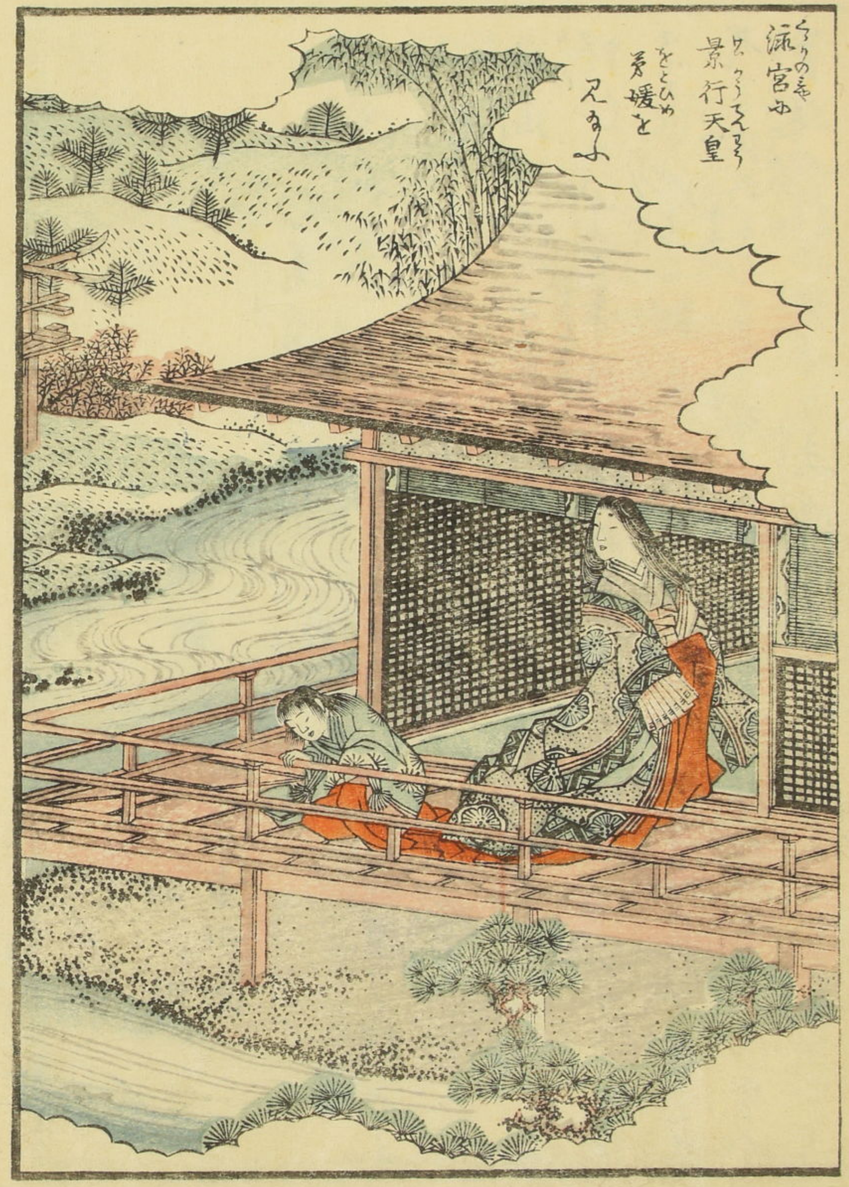
通計十五像

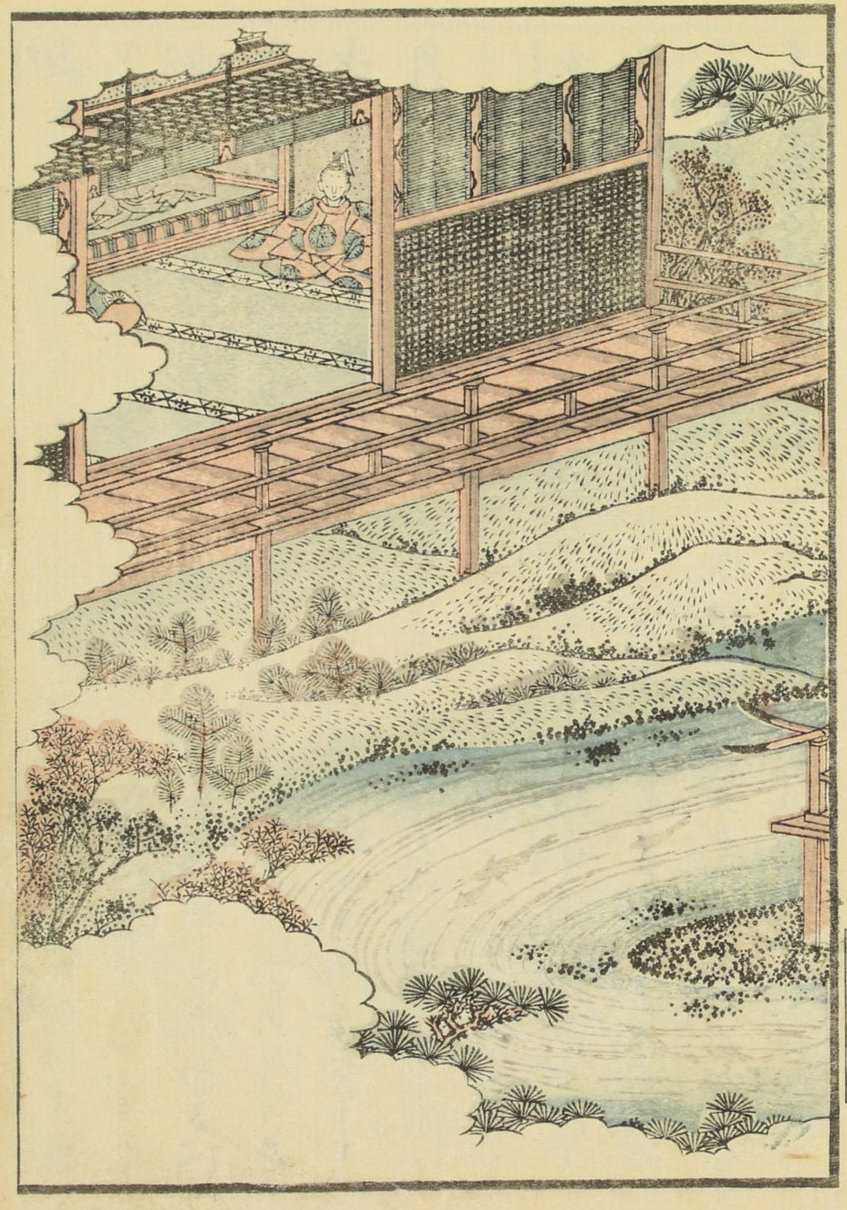
繪本姿はの海上ゝ巻

東都　絳山撰
柳川重山画

○美濃弟媛

美濃弟媛は。八坂入彦皇子の女なり。容貌うるはしく。心ばへさえ正し。景行天皇。美濃より行幸の折ゝ。弟媛の居所を叡聞あり。弟媛を召て。帝権ゝ。弟媛をして。泉宮に居らしめ給ひ。池ゝよ鯉魚ゝ泳ぎ戯れ給ひ。弟媛これを見て。池の中より。帝を。惑とぶめゝ。姪我んやこゝの。弟媛の程を想へ。夫婦のさまを。人の知れど。奴あに知らざ


流宮ゆ
景行天皇
をとひめ
弟媛を
見そなふ

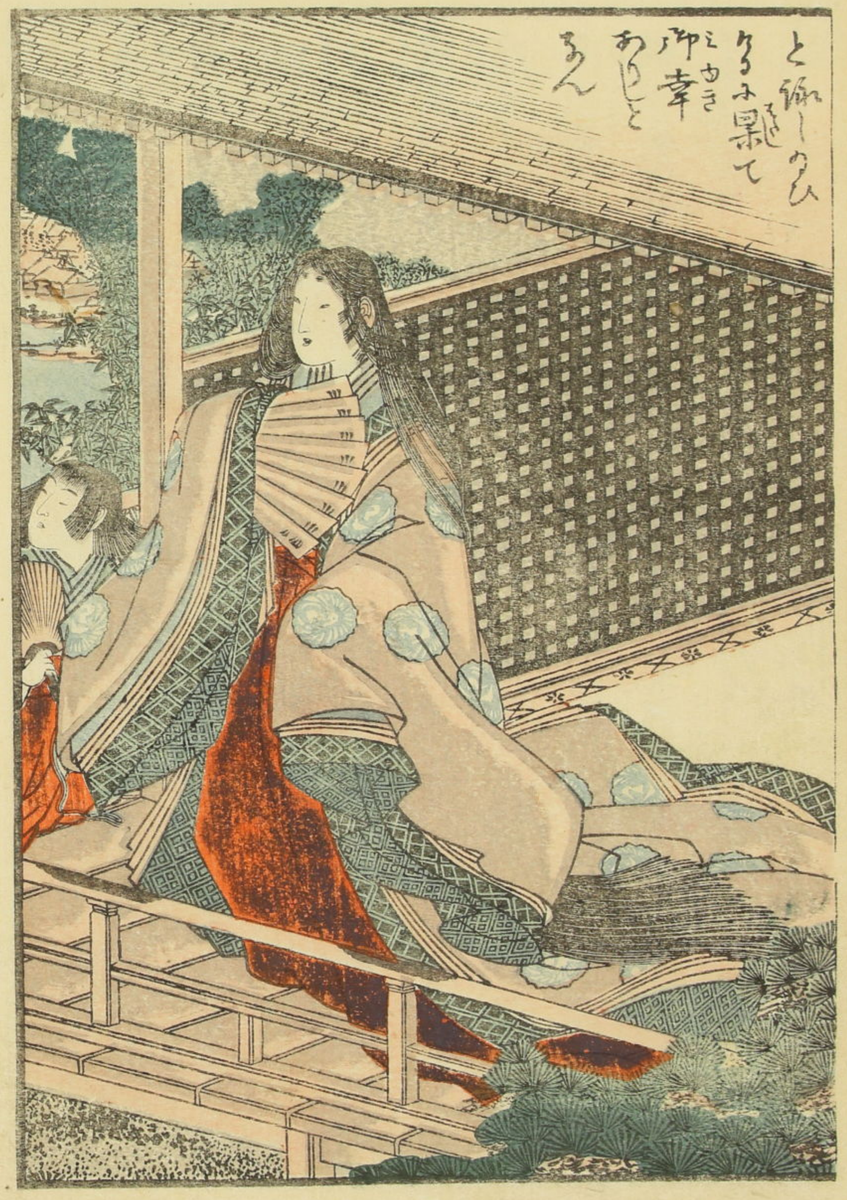


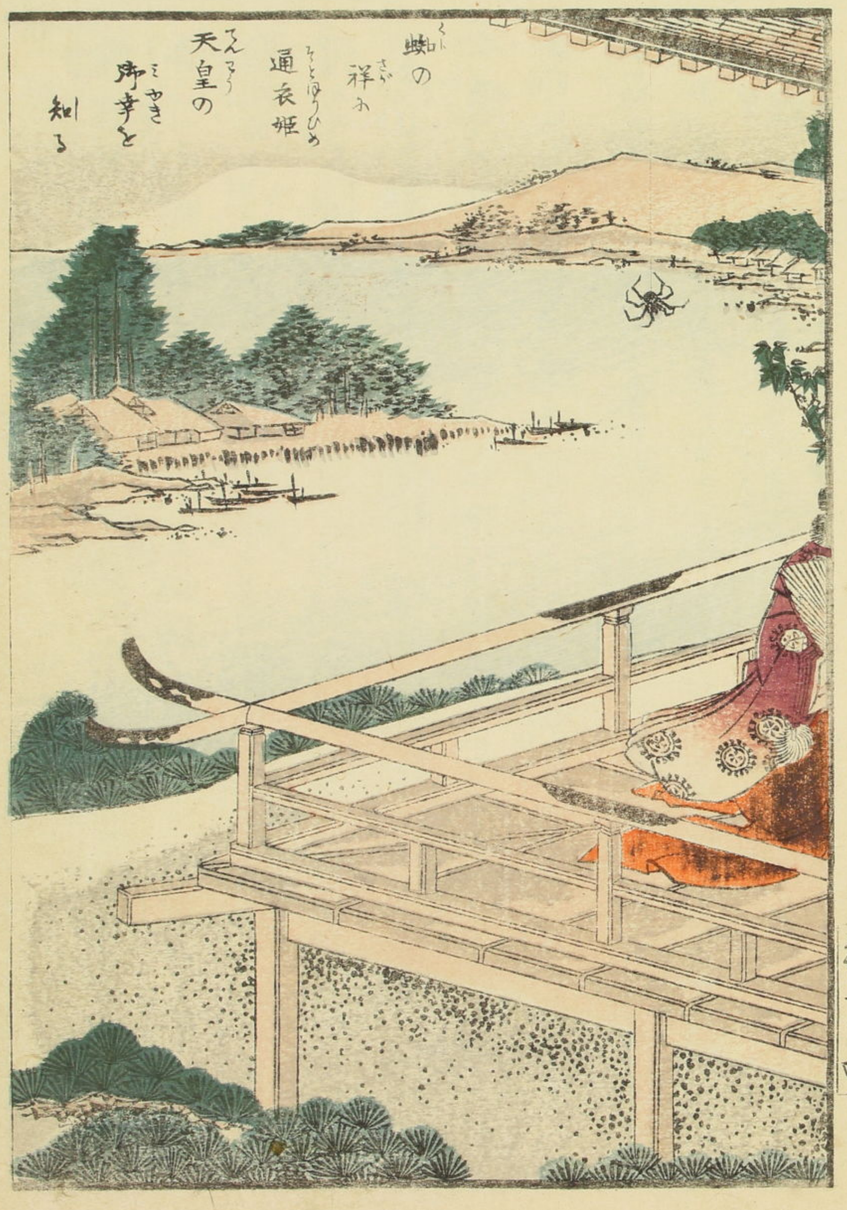
敬せず。詞甚だ慎まざるなり。帝より宥え給へども。勅命いと畏
くもしど。奴家が性。色を好まざるに。貌さへ醜くしかばいつぞ
後宮に侍仕せんや。姫なるハ坂入媛こそ。容貌美麗なるに。
情深くまします。お妃なん。叡慮に叶ひいつもこの事ゝうだ。
帝女言を叡聽あり。勅命しきハ坂入媛を女御とせさ
せが。叡慮にかなはずして。皇子七人を産まゐ給せしとなん。

○衣通姫

衣通媛は。允恭天皇の皇后。忍坂大中媛命の妹君おはす。
容貌美麗。艶色の。衣を徹して見るとなん。衣通媛と称ぬ。
天皇。衣通媛を恋ましたまひ。頻に召れ給へども。姉君ゆゑ
ゆゑ。勅命に應じまゐらず。雨あまり叡慮止ま

まるべしバ。大和國藤原の宮に。媛を居まゐらせ。寵愛せ
給ふ。皇后嫉妬し。反知らぬ。地にうちかぶき。自ら
焼き死んと。狂ひ給ふ。天皇も強固にあらせ給ひて。衣通媛を
河内國茅渟宮に移し。長き。那くに遠程きこゆれば。
皇后の怒り。程にたりぬ。皇后天皇をうらみ恨て。茅渟
宮へ行幸あり。尚深く語らひ給へば。媛も天皇に志三年の
深きを。思ひ。ひとしく恋慕ひ給へり。
天皇。媛に問給ふ。一甲斐の国どこ。
味しく。なるなり。情ゆゑ。天和の方を
思ひ。行幸あり。
系せ。


と御しのび
なみ墨て
御幸
あり
とも


蜘の
祥ゐ
通長姫
天皇の
御幸を
知る

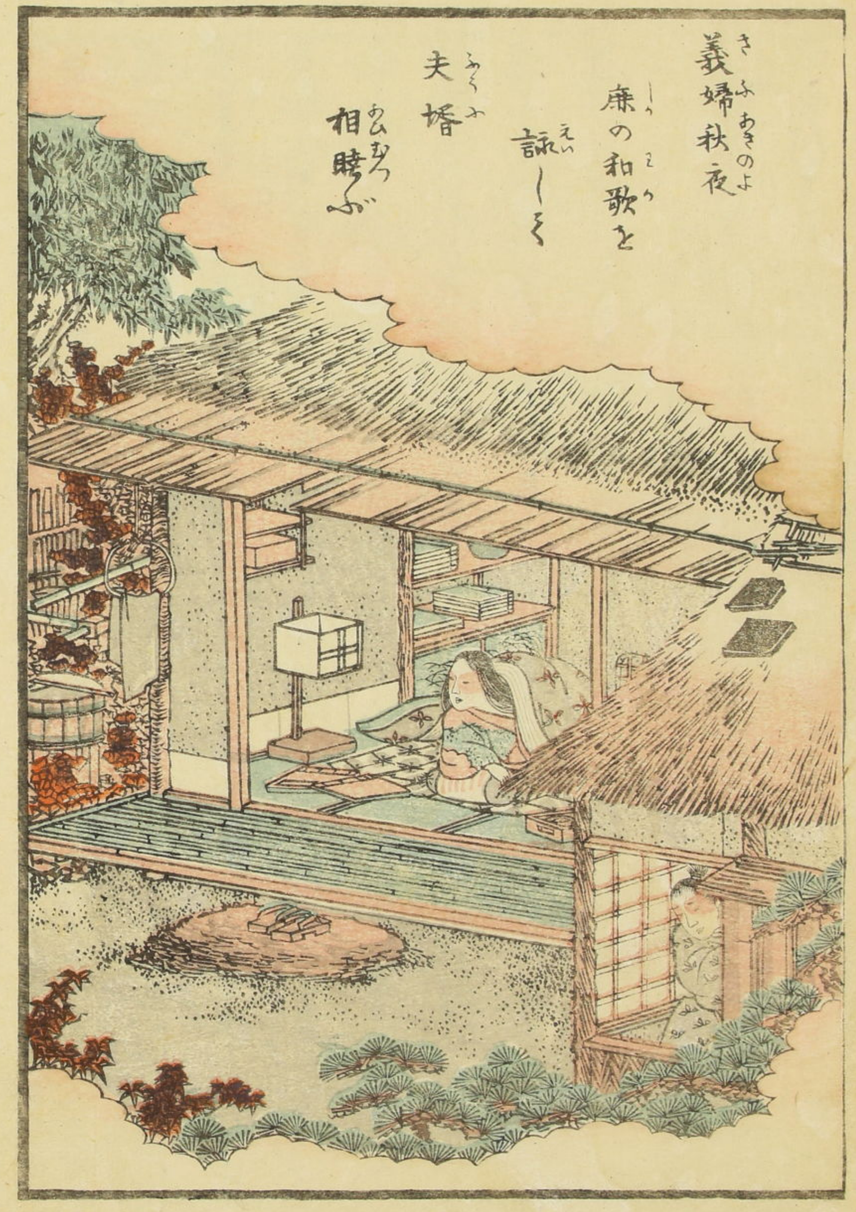
○豊前刀自賣

難波部首刀自賣は。豊前國の人なり。容貌美麗なり。十八にして。下毛國。宮守の妻となりぬ。婦道厚くあつく。勤めつとめて。教ひらるほどふ。夫婦の間睦しく。芳花の契淺からず。廿年にして。經なくなりぬ。有為轉変の世なれば。不図宮守病ふかく。遂に没命。刀自賣は。天を仰ぎみ。地に嘆きく。紅涙袖を染るのみ。今人憐を催しぬ。斯るも果べきことわりなれば。親兄弟も命を棄て。刀自賣を勇めに諫め。宮守が屍を送葬し。墓を立て。刀自賣夫の後を追ふ。絶く容せざれど。生質性淑女なりしば。既に盛を過しのまど。さもぶかき艶色あれば。遠近の好男子。多迎へんといひしまども。二夫に更るは。丈夫の義にあらざるとて。

暮ひ。世を存命とて。麻衣を妹の上に奉重。敬ひ給仕の。まるゆみ。もし他の。珍らかなる物を頼まば。ひまづ。夫に供へ。自ら。物も食らず。斯る獨寡を守るの。年經のまど。柳の言葉。同間看るものを。ひとへ。ものさへ。貞操の名を。威ど。賞讃ぶかはかりなり。世中。國司が。つうえ。知れしば。彼る貞婦。世に貴ぶべしとて。遂に。形状を詳に奏聞。ありなれば。畏くも。天長四年の春。新に勅下りて。刀自賣が。徭役。平家の課役と。孝貞とも。免しのひたるとあり。

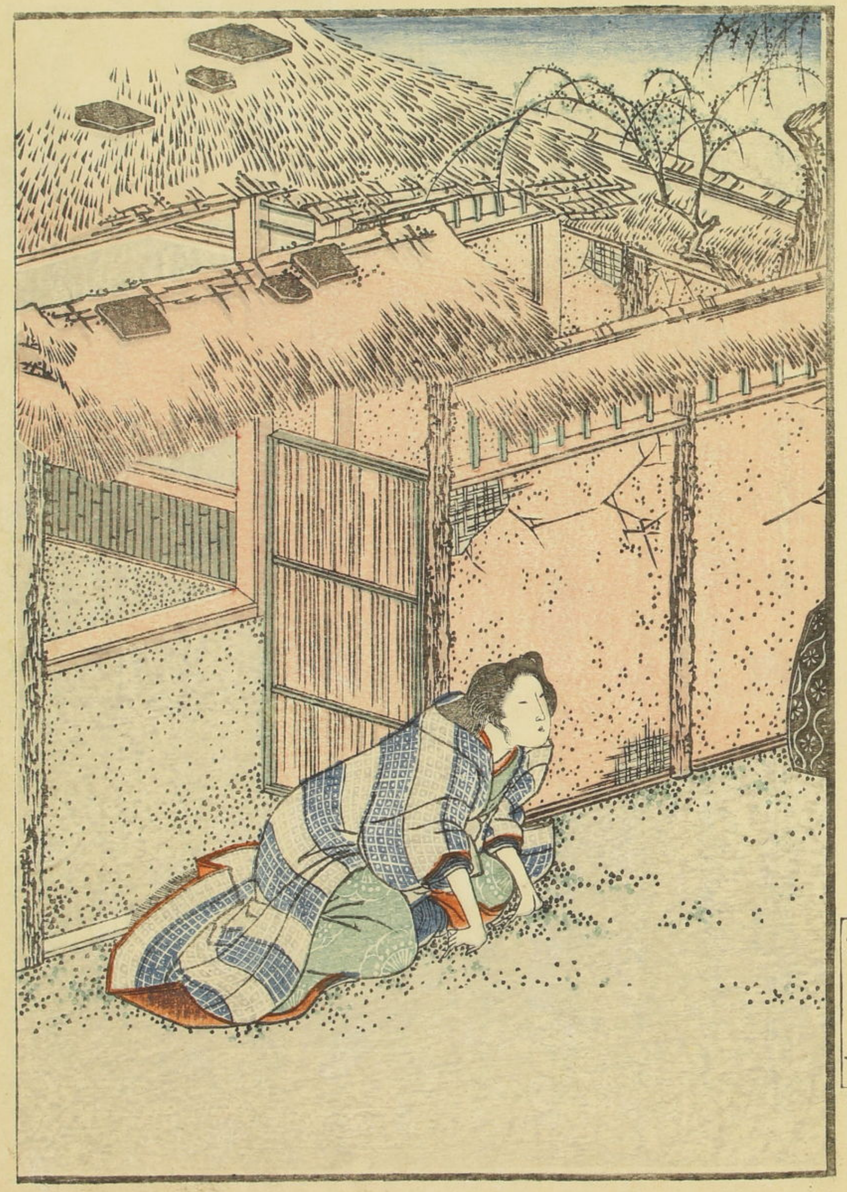
○大和義婦

いにしへの時。ありあるの。大和國に。丈夫。ものあるの。年。壮ひ。語らひ。ひとりて。きりん。丈夫。他婦を。ぬくるの。壮女を。


義婦秋夜
康の和歌を
詠しく
夫婦
相睦ぶ

第上ノ六

守節門閥ヲ表して
刀自賣貞操を
旌す



前妻をバいとゝ疎ましくなれど。さすがに幸ひ深き身。延
べもせで。袴を傾きて移しー住しーける。前妻を形だ
うわに。雑面めふあんまど。斑女が閨よあーしひども。猫枕を
守りて居るよ。時々やさしくもぎまする秋よありぬ。一枚屏風
なりもかうもかも。恋をうもかこうも。色こーうこ対まり
星彼と。思ひ焦がるふ。世を飛ぶ川のゆくえも知らず。時々の
海を今なの閑と。沼草をはの形思ふ。妻を恋ひ
ものいとゝ儚ふ。つくえれば。邪身のうへよつまれぬ。夜を深し
ぬ。此時夫も見て。笑ーこうん。望を傾くゆめえ。いつ
今鳴る蛙の声を。何とつのあるに。田舎をバせず。
家も志ろ鳴くとと人よ恋ふ。今ととよ形ふ形をのこ字け

と渡りもしたまこのぎの形く懐よ思ひ。近江嫁ーを悔ひ
思ひく。後妻をバ出ーやと。前妻と睦ごと。昔よ深ーるとあん。

○大井子

佐伯氏長。とゞめて相撲の節ふ召れて。越前国より上る子。
近江国石橋の宿あて。清らかなる女の形ふく頂き形をとく。氏長
心動き馬より下りて。女の桶とくへる肱のとゝへ。
りふ。女ども嘆くもとる筆色ものく氏長を服ふとき
とゝ氏長興ありと思ふほどふ。良久しくなれども山を放ぐれば。
せんくとかくをあくと。女の形ふちぐひく家よ入りぬ。水ともも重て。
をを如ーとうも咲ひ。さうもいるる人中。かくてきのみといふ。
近勝とくく壊ぐくく笑えるの。吾ハ越前国より。相撲ふ召れて

背ぬと
大井子
途ふ

婦戯
牡矢と
懲も
ふぢ上ノ九

参るなりと語るを聞て女の云。あぶなきまでもてなす。王城を廣くれば。世に勝れる大力も彼くん。主下も労れ甲斐なし。
めくるをあるれども。左程の大きなる違へべき器ゆゑ。
あるまに養ひ給へ。遥遥あるへとぞ。丈夫強き飯を。
彼女捧ぎ食べるに。おしも食はれぬ。始の七日は元く。
食はれざりしが。次の七日より。漸く食はれ。第三七日の間
よく労りて。今をもて上せ。さりともとも覚れそ。上せ
るに。氏長よ續く相撲をあるる。此女は高島の大井みとく。
かれ力の女なりとぞ。大井みは水口の石とく。彼郡は今も尚ある故なれど。文長は編しり。

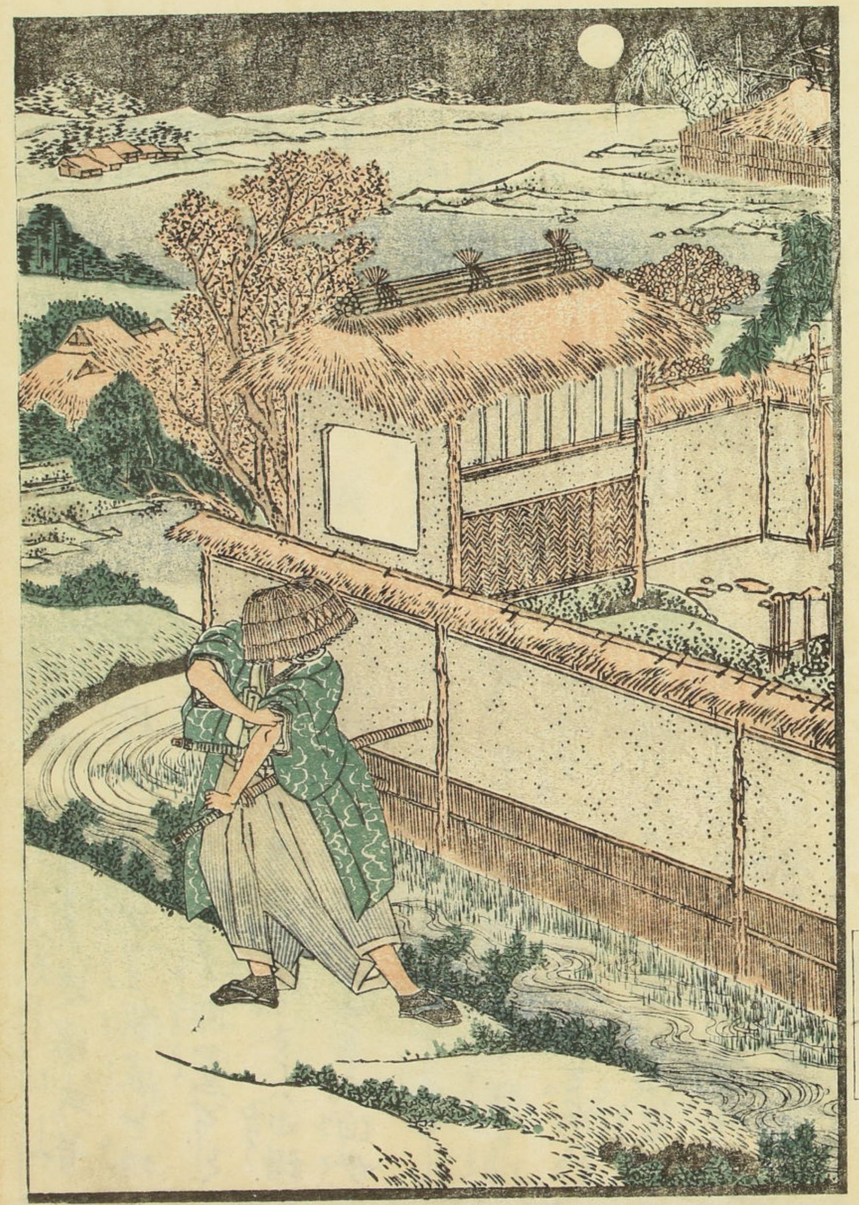
○金子

近江國海津の遊女に。金子といふものあり甚頃東國の武士

大番ゆく上京をとく。日高く宿るに馬どもを洗ひ入て冷るに。
物よ驚き。蓬放まて狂ひ走るに。此捧女行逢るに。驚きて
ものもなく。立ながら弱ぬ。馬の差縄の端を強くしめもく
馬とまりぬ。人々目を驚かす。限る那。甚迷ふ
深く入く。足頭まで埋まる。白波の入るまで。けるをば赤何
ある男といふも。五人くしたる。得たりと。自称しるとあん。

○阿都麻

阿都麻が名を。袈裟と呼べるなり。其母奥州衣川よ。
しにあるく。衣川と称へる所ぞ。その女児あるをもて。袈裟とも
いへる。此女容貌ひとり艶妖あるさへよ。情のまく深く。
意ぐんあるに。見る人心を動ぬ源渡とうえる。深く懸ぬ。



あぢ上ノ十一

遂に親迎して妻となしぬ。されど衣川が甥なりける。遠藤武者盛遠といふものありけり。一日渡邊の橋供養の折り、袈裟を垣間見たりしが、忽暴の情堪がたく、ひそかに衣川の女房渡が妻なるまし回應なるまどさてハ由緒ありける人なりけり。されば衣川の浮名を憚り、言語ハなかりけり。伯母衣川を引き捉へ、腰刀ぬきて胸ふけりあて。僕袈裟をえて、よ来心死ぬべきぞふ怨恨。はやく袈裟を呼戻し。僕ハ死ぬべらんと。母の死さしめへ。雨らぞ其人を害ずるし。僕も死ぬべらんと。母の死ぬべらんとなりけれバ。衣川怒りて諾ひ。病ハ加へ。袈裟の許へ贈る。素より孝心篤くれば。うち歎ひく慌忙く。髪一人を倶し。母の許へ至りバ。母法く盛遠が事を語る。袈裟

聞て浅猿しく。鬼角想ふ。孝心なんとなれバ不義なり。不義なるしとバ不孝なり。心を定めて。盛遠に対ひて云ふ。其人を實ハ妾家を思ひ。吾夫渡を害へ。雨せバ人ぶく。ぶ孝なんと。歎きけれバ。盛遠ハ渡を害んとなりけれ。某夜赤丈沐して。髪の濡しを洗ふなりけ。やう約言して別れる。はく袈裟ハ毛萩の衣閨裡ふ。身ハ髪を洗ふく。渡が臥房よ赴く。盛遠ハ約を違ずして。渡が教へる処ふ踏り。閨夜よ進ずるに。髪の濡しの赤ものと。腰刀ぬきて首をこのき切く。深渡が怨ふ害まぬとんず。此秋討ずして首をとるに。

金子が怪力奇馬を駐む

渡あるべき。架裟あるべし。咳然として架裟の貞操の程を感じ。悲嘆せしよ甲斐あるべく。家身の非義を悔ひ渡が許より。あるべしなを結ぶ。家を害しく。妻の仇を報へとつるべし渡の云ふ。あるを足下に殺さんとく。望を果せば。いそ仇とるべき。家ハ妻が菩提を吊んと忽ち出家なれば盛遠いよく歳。自ら髻を切て遂に漆衣の方となり。盛阿弥陀と法号して。架裟が菩提を吊ひるとなん。

○巴尼

木曾義仲の妾巴を中三権頭兼遠が女児。容貌麗艶なるに似げなく心雄々しく。力の強弓を挽馬に跨太刀合せる業。壮夫にまさり勝れり。木曾との殊に愛ひ。いづれ軍にも将なく。一方の大将となり。後れをとらしめず。

渡上ノ十四

項木曾どの内に鬼神と云へる今井。樋口の人ふ。おのく劣らぬ。勇ましき名をかゝ。頃ハ粟津の戦に木曾どの側を去らず。内田三郎家吉。御田八郎師重あんどを。猶倉方ふく。剛者とえを捨首撥首して。目覚しく戦て歓を討麿を。幾許回ありしぞ。木曾殿の運ふ拙り。今ハ斯と。巴も本曾殿の最期に後んと。支度準備をして。木曾殿ありしを。何事やらん金金めの。巴に義盛ハ賜りく妻とせしが。巴に義盛ハ義秀と。一人の男子を生そこ。朝夷三郎義秀と。母の力を稟くん。世に双なき力ある人に心もの。猛くして人を恐怖あり。建保元年和田合戦の当時に。義秀只一人して。閉る大門を押破る。

あハつのそう
粟津原ゐ
巴女ともえ
ゐんき
単騎
ゐ〜く
血戦けつせん
を

あぢ上ノ十五

敵数多討とりしうど。寡を衆に敵しがたく。和田の血属亡く
討死しぬるまじバ。義秀も遂に知らぬ巴ハ朝夷ぶ
りを耳に。嘆き泣けど甲斐なく。是彼を越えこのう想ひ。
世間のあぢきなきを忍ち墨のそむく貌とこの。巴尼と
法師し。七人くの善提がつうハ力の後世の営しく会仏三昧の
徳あるあるべ。九十一歳の寿を保ち。目でやく度往生を遂しを
ぞ。

繪本曽我の内上之巻終